「海の九鬼」から「山の九鬼」へ

寛永10(1633)年３月11日、志摩国(しまのくに)鳥羽城主九鬼久隆(ひさたか)は祖父守隆(もりたか)の遺領のうち３万６千石を継いだ上で摂津国三田に転封(てんぷう)となり、あわせて守隆の三男であった隆季(たかすえ)が、別に幕府から丹波国綾部に２万石を賜って移りました(「徳川実紀」)。実は九鬼守隆は志摩・伊勢両国で５万６千石を支配していたので、実質的にはその支配規模が三田と綾部とに二分割された形になっています。

その背景には前年９月に亡くなった九鬼守隆の跡目争い、いわゆるお家騒動がありました。この経緯については７月１日に刊行された市史第１巻に詳しく触れられています。正妻との間の長男である良隆は病弱のため跡継ぎを断念し、次男貞隆も早世していました。そこで側室の子である隆季と、女官との間の子である久隆のどちらが跡を継ぐかをめぐって、有力な家臣を巻きこんで家中が二分される事態が起こったのでした。

形式的には久隆が長男良隆の養子となり、守隆の孫としてその跡を継ぐ形をとって三田に移ることになりました。その背後で大きな役割を果たしたのが彼の養母であり、江戸での奥方(家政)を差配していた宗心院(そうしんいん)という女性でした。彼女は守隆と正妻との間の子で西照院(さいしょういん)とも呼ばれました。詳しくは市史第１巻や第３巻に掲載された系譜資料をご覧ください。

「山の九鬼」成立の陰の立役者ともいうべき西照院は、現在、三田町の正覚寺(しょうがくじ)境内の一角に静かに眠っています。その大きな墓石をめぐっては、鳥羽からの移転にまつわる「迷子になった墓石」という著名な民話が伝えられています。民話には史実とは異なると思われる部分もありますが、「海から山へ」の立役者であり墓石の規模も大きいがゆえに、九鬼氏の転封にまつわる伝説として末永く語り継がれたのでしょう。

このお家騒動を経て、九鬼氏は「海軍」の伝統を断ち切ることになりました。そのことは「海兵」であった有力家臣の基盤を断つことで、逆に殿様を頂点とした三田藩の体制を固めることにつながったと市史では評価しています。「海から山へ」の移動により、九鬼氏は幕末まで続く基盤を確立することになったのでした。

生涯学習支援課 市史編さん担当